

二〇〇八年の回顧「マスコミ」関係書（週刊読書人）

相変わらず佐藤卓己（京都大学准教授）の筆が冴えている。「一億白痴化は一億総博知化だった?!」という帯のついた『テレビ的教養』（N.T.T出版）と「空気より意見、ゼロンよりヨロンなのだ」の『輿論（よろん）と世論（せろん）——日本の民意の系譜学』（新潮選書）の二冊は何と云っても面白い。

大宅壮一の「一億層白痴化」（一九五七年）発言は、わずか五%程度しかテレビ受像機が普及していない時代、テレビ的機能を見通した言説として知られている。佐藤の著はそのテレビ文化の大衆化Ⅱ大衆文化の背景に占領政策が見事に反映されていること、またテレビ普及の実相は放送

教育の歴史にあることを分かりやすい文体で説いている。放送史を教養・教育史の観点から再構成したところが著者らしい。

雑誌『考える人』（新潮社）に連載したものをまとめた後著は、漢字制限による使い分けが、統計調査の数字として表出し世論の変質を生んだという。大新聞の世論調査がいかに危ういことを改めて説く一方、世論を良質な「輿論」に導こうとしない現状を指摘する。

その佐藤が「面白さでは勝てない」と評したのが、小田嶋隆『テレビ救急箱』（中公新書クラレ）。帯にある「テレビよ、おまえはもう死んでいる……！」とはどこかで聞いたせりふ。世の中がア、ソウカ（麻生化）し始めている。そのテレビが爆発している中国メディア界を描いたの

が渡辺浩平『変わる中国 変わるメディア』（講談社現代新書）。一党独裁ではあるにしても、視聴率争いから急激な商業化がテレビを侵食する一方、党機関紙の読者離れ、一党多様なメディア状況が出現している。衛星放送やインターネットが中国社会を変えつつある状況を詳述している。

北京五輪のメディア狂想劇を思い出しつつ読むことをお勧めする。「ふたつの顔、ふたつのメディア」（終章）は当分続くだろう。中国と対照的と言えないにしても、「世界の市民が創るメディア」を探るのが、松浦さと子・小山帥人（編著）『非営利放送とは何か』（ミネルヴァ書房）である。

ところで、支持率二割と低迷しながら、麻生化するニッポン。漫画やコミック、アニメだけがニッポンのソフトパワーなのか。大石裕・山本信

人（編著）『イメージの中の日本』（慶應義塾大学出版会）は靖国問題、北朝鮮ミサイル・核、日本外交などを通してメディアに現れた日本の自己イメージと他国の日本イメージを再考している。

同書が新聞メディアを主として分析対象としたのに対し、萩原滋（編著）『テレビニュースの世界像——外国関連報道が構築するリアリティ』（勁草書房）は映像や「人の語り」といったテレビ独自の特徴にも焦点をあて、いかなる世界像をもたらしているか、教えてくれる。

「第五の壁」といわれた四角いブラウン管もいまや薄型の液晶、プラズマが主流となり、二〇一一年にはアナログ放送が止まる。われわれは再び「一望の荒野」に向かうのだろうか。

では、その送り手について

はどうなっているのだろうか。
上杉隆『ジャーナリズム崩壊』（幻冬舎）が売れた。同書に描かれているジャーナリズムの実態と批判は一般読者受けするかも知れないが、必ずしも全て著者の主張に賛同するわけにもいかない。俎上にあがる問題点もこれまで指摘されてきた枠で論じている。むしろ、『戦争絶滅へ、人間復活へ 九三歳・ジャーナリスト』（岩波新書）を「遺言みたいなもの」として上梓したむの・たけじの反戦、平和の訴えがより強く響くのではないだろうか。

ニコラス・ラスキン、塩原通緒訳『戦争特派員 ゲルニカ爆撃を伝えた男』（中央公論新社）の主人公は、ザ・タイムズの特派員ジョージ・ステイア。舞台はエチオピアとスペイン。そして平敷安常『キヤパになれなかったカメラマ

ン―ベトナム戦争の語り部たち』（上下巻、講談社）は、ABCカメラマンとしてベトナム戦争に従軍取材した著者が八十人以上のジャーナリストの生き様を綴っている。戦争が風化するなか、貴重な二書である。

最後に、メディアの歴史を語る新書本。坂本慎一『ラジオの戦争責任』（PHP新書）はこれまで見過ごされてきた「声の文化」を演出した松下幸之助、松岡洋右、下村宏らをとりあげ、玉音放送の内幕を語る。菊池良生『ハプスブルク帝国の情報メディア革命―近代郵便制度の誕生』（集英社新書）は十六世紀に遡る情報インフラの成立を描いている。

人は何を求めて近代化を遂げ、何を得たのだろうか。

鈴木雄雅（すずき・ゆうが
上智大学文学部教授・新聞学
専攻）